論説

シャン民族知と近代

髙谷　紀夫

はじめに[1]

本研究は、シャン民族知に関する歴史人類学的研究の試みである。本論で扱う「民族知」とは、民族論的状況［名和 1992］の文脈で規定された、あるいは範型づけられた知識の集成である。具体的には、“民族”起源神話、“民族”の自画像、編纂された“民族”の伝統文化など、自“民族”意識の構築・再構築の文脈において表象される知識の総体を想定している。また構造的に、他者との関わりにおいて、当該“民族”の呼称の外延に沿って、非-自“民族”との差異化の意識などが「民族知」を基盤に表象され、実体化する傾向が認められる。

シャン（Shan）とは、現代的文脈では、ミャンマー国内に居住するタイ（Tai/*Tay*）系言語を母語とする人々に対するビルマ語の他称で、タイが自称である。歴史的に Shan の類語は、*Syam* として 12 世紀バガン期の碑文に初出する[Luce 1958: 124]。なお Tai/*Tay* の現代的意味（free）の初出は、17 世紀に確認［Wijeyewardene 1990: 48]される。

ただし、通時的に、シャンを、ある文化的特徴を有する人々に対するカテゴリーと規定するには留保を要する。なぜならば、シャン（Shan）というビルマ語であれ、タイ（*Tay*）というシャン語であれ、単独では、「人」をさす場合だけではなく、「地域」をさす場合、「言語」をさす場合、さらにはかつての伝統的首長（シャン語でツァオパー/*Cawphaa*、英語表記で *Saopha*、ビルマ語でソーボワ/Sawbwa、自治権は 1959 年に政府に返還）制の記憶の文脈で語られる場合などもあるからである。「人」か「地域」か「言語」か、あるいは歴史性の表象か、それぞれの文脈に留意しつつ分析を進める。

本論考の民族知研究でテーマとするのは、“シャンの「くに」”という言説とその文脈である。その契機は、現ミャンマー北部カチン州での臨地研究中に、次の語りが、地元で尊敬されるシャン史の語り部から吐露されたことにある。「自分たちシャン族は、ビルマ人のような『くに』のない民なのだ[2]」と。しかもシャンを冠称した民族州である現シャン州ではなく、シャンの伝説の王国の重要な舞台とされる現カチン州においてである。筆者は、ビルマ語とシャン語の両方で、その表現の差異に留意しながら、その場で確認したことを憶えている。内容自体は、シャン族自身による自民族史の遡及的な語りであるが、伝説の王国の存在を、必ずしも背負っていないように思えた。また、明らかに“シャンの「くに」”をめぐる含意は、“ビルマの「くに」”との比較の文脈で成立しており、ビルマ人（現多民族国家のマジョリティ）への対抗的な意識が認められたことと、ある意味で、冷静さと自負が印象に強く残った。

筆者は、過去、シャンとビルマの民族表象と文化動態とその交渉に関する論考を発表してきた。その結果、近代において導入された「文化」概念を表現するビルマ語とシャン語の語源が同じであり、文化的営為を束ねる「文学文化（literature and culture）」という枠組み、リテラシーの基本的能力、さらに自文学功労者顕彰の日の設定など、シャン民族知の表象の複数事例がビルマ文化由来であることを確認してきた［髙谷 2008 他］。

本論考は、シャン民族知の構築・再構築をめぐる事象を対象にしているが、その事象が顕著に認められ始めるのは、西洋世界との民族知の交流が活発化する「近代」である。従って、本論で言及する「近代」についても、説明が必要であろう。時代的には、ビルマ王朝時代の植民地化前夜から現在に至る 19-21 世紀を視野に入れているが、その意図するところは、構築される民族知に影響を与えた西洋近代の「知」の介在への注目である。換言すれば、西洋近代との邂逅と交流が、民族知に輪廓を与え、自“民族”意識の構築・再構築に影響を与えた歴史的事実と、現在、自“民族”の語りを優先する文脈でその事実が看過される傾向が認められ、民族誌的記述においてもほとんど言及がなされていないという学術的問題点に留意している。ミャンマーにおけるその歴史的事実の根拠とは、次のようなものである。

現ミャンマー（旧ビルマ）連邦共和国における「知」の拠点の歴史は、英領植民地時代に始まる。1886 年より同国全土を支配下においた植民地政府は、1902 年にビルマ碑文局（Burma Epigraphy Office）を開設する。同局は、1948 年のビルマ連邦としての独立以降に考古局として引き継がれる。また歴史学、文学など広く学術界を主導するビルマ研究学会（Burma Research Society）は、植民地政府副総督をパトロンとして、設立当時、ICS（Indian Civil Service）でもあった英国人ファーニヴァル（J.S. Furnivall, 1878-1960）を中心に 1910 年に設立されている。このビルマ研究学会を舞台に、土着の知識の考察がなされてきたのである[3]。同学会は、独立を経て 1970 年代後半まで、軍事政権下も含め「知」の拠点であり続け、そのジャーナルは、現地で高い学術的権威を誇ったことで知られている。従って、有形無形の土着の知識の共有の場は、植民地時代に遡り、西洋近代が関係していたのである。

たとえば、その具体的なテーマとなったもののひとつが信仰である。ミャンマーは、現在でも総人口の約 8–9 割が仏教徒で占める。そのマジョリティの信仰対象をめぐる言説は、キリスト教との比較と対照で鮮明となる。その先駆的な役割を果たしたのが宣教師である。彼らは、布教活動を目的に、旧約聖書・新約聖書の現地語訳と現地語の辞書編纂などの作業に取り組んだ。ビルマ語・英語辞典、シャン語・英語辞典を編纂したのが、それぞれいずれもバプティスト派の宣教師であった米国人ジャドソン（Adoniram Judson, 1788-1850）、及びクッシング（Josiah Nelson Cushing, 1840-1905）であったことは決して偶然ではない。彼らの活動は、ビルマ研究学会誌上でも、“What Dr. Judson was to the Burmans, Dr. Cushing was to the Shans” [Maung Tin 1911, 1912] と現地のビルマ人知識人に評価されている。彼らとその同僚は、現地で多数を占めるビルマ人仏教徒、次いでシャン族仏教徒への布教活動に従事したが、結果として山岳部に住む非ビルマ族（カチン族、チン族など）が、改宗者の大半となった。従って、布教活動は必ずしも成功したとはいえないが [Sai Htwe Maung 2007]、彼らの辞書編纂・文法書執筆活動などの現地語理解の過程で外来と土着の知識が交錯し、特に、各土着言語のコーパスが辞書という形態で輪廓を付与されたのである。

また歴史的な民族知の語り部として、スコット（J.G. Scott, 1851-1935）

の名前を外すことはできない。スコットは、王朝時代最後のビルマを、ラングーン（現ヤンゴン）にあったセント・ジョージ・カレッジの教師として過ごし、英領インドの植民地下のビルマでは、ジャーナリスト、そしてシャン地方の行政官などとしてその激動の時代を生き抜いた。ビルマ語のみならず多くの言語に精通し、ビルマとシャンを中心とする諸民族の文化と社会について、克明な記録を残している。シュエ・ヨー（Shway Yoe）というビルマ語ペンネームで記した *The Burman: His Life and Notions*（初版 1882）は、当時の英領植民地社会の様子を巧みに描いた著書であり、現在も引用に耐える文献である。また彼が中心となって編纂した地誌である *Gazetteer of Upper Burma and the Shan States* の二部全五巻（1900-1901）は、現在、シャン州周辺の広域的調査が政情不安と治安の問題から実現不可能な状況において、一級品の二次資料なのである。ミャンマーはもちろんのこと、西洋による植民地統治を経験した諸地域における民族知の言説は、その程度の差こそあれ、またバイアスこそあれ、上記のような西洋近代との邂逅と交流が基盤となって構築・再構築されてきたといえるのかもしれない。

１．問題の所在と本論考の構成

本論考で注目する言説は、シャン族知識人が語った「自分たちシャン族は、ビルマ人のような『くに』のない民なのだ」である。同言説とその文脈を論理的に考察しようとするならば、少なくとも三つの視点が重要となる。第一に、シャン（Shan）とタイ（Tai/*Tay*）の用例上の区別とその互換性に対する視点である。その変遷をたどる。第二に、シャン語とビルマ語の「くに」をめぐるタームとその意味領域に対する視点である。「くに」という政治的統合の「地域」と居住する「人」との関係を、シャンの人々はどのように捉えてきたのであろうか。民族知に関わるその語りと文脈を、〈遡及的〉と〈現実的〉とに、分析上、便宜的に区分して考察を進める。第三に、第一、第二の特徴への西洋近代の「知」の関わりに対する視点である。本論考では、「くに」に関する議論を、より明晰にするために、ネイション史研究者植村和秀による分析概念を援用する。本論考は、以上の問題意識に沿って展開する。

２．シャン（Shan）とタイ（Tai/*Tay*）の用例の変遷

歴史的に、英国による現ミャンマーの植民地経営は、1886 年、英領インドへの編入という形でスタートした。インド政庁は、エーヤーワディ河流域の平地部と、少数民族が多数居住していた山地部を再編し、平地部には弁務長官を配置して直轄領である管区ビルマとする一方で、山地部では、当初一部抵抗があったものの、王朝時代末からの首長制の存続を認めて間接統治を行う分割統治が実施されたのである。その後、1897 年にビルマは自治州となり、1937 年にビルマ統治法制定により、英領ビルマが成立する。上述のスコットの調査研究は、このような政治的状況において行われたのである。英国は、そのような経緯を背景に、ビルマ側から得たシャン（Shan）という民族的カテゴリー表現を、北部タイ（Northern Thai）にも拡大的に適用するのである[Wijeyewardene 1996: 10]。

西洋近代の「知」との交流は、民族知の文脈では、近代的な言語学的知識との接触も意味し、タイ (Tai/*Tay*) 系語族のカテゴリー化が始まる。植民地政府によるセンサス結果でも、独立した語族カテゴリーとして区分される。

東南アジア大陸部の言語学的根拠に基づいた全体像が、引用に耐えうる形態で関係学界に認知されるに至るのは、1960 年代以降まで待たなければならない [Lebar et. al. 1964]。すなわち、タイ・カダイ (Tai-Kadai)系という独立した語族カテゴリーが、1940 年代に、米国の言語学者ベネディクト (Paul King Benedict、1912-1997)が提唱して以降、次第に広く受け容れられるようになり、結果として、シナ・チベット語族、アウストロアジアティック/モン・クメール (Austroasiatic/Mon-Khmer)語族、マラヨ・ポリネシアン (Malayo-Polynesian) 語族とともに四大語族として認知されていくのである。その先駆的な言語学的分類方法活用の痕跡は、19-20 世紀前後まで遡ることができるのである。

上述のスコットが活躍した 19 世紀後半から 20 世紀初頭の時代、英国植民地政府の関与は、第一義的に政治的・領域的（political-territorial）だったと米国のシャン研究の人類学者ターネンバウム（Nicola Tannenbaum）は分析する。その関与の構図が、シャンに関してもっとも拡大的な次頁の Figure 1 のシャン理解を促進したとも評価する。他方、対照的に、スコットの理解は、

Figure 2 のようであったと彼女は図式的に説明し、スコットの民族知の一端を解釈している[Tannenbaum 2009: 4-5]。（Figure の説明は筆者による）

Figure 1：〈Shan〉の拡大解釈

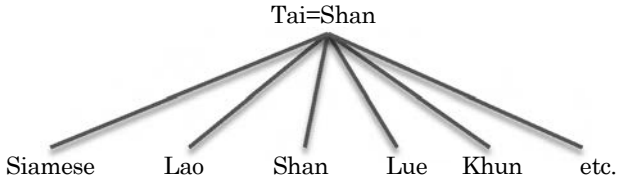
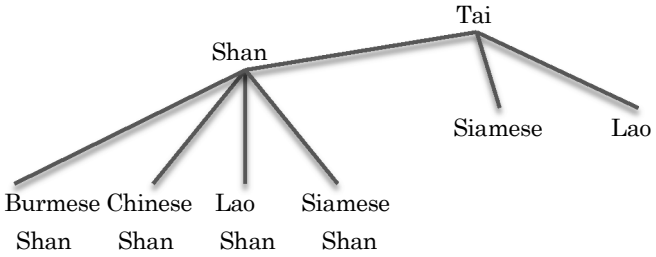


Figure 2：タイ化（Tai-ization）



すなわち英国植民地政府によるシャン認知という出発点が、シャン＝タイ(Tai)を拡大化させていったことになる。対照的に、スコットの理解は、現場の言説とより合致しており、タイ（Tai）をシャンの上位に置く。そのシャンの下位区分として、ビルマ系シャン、中国系シャン、ラオ系シャン、シャム系シャンを類別して、シャム、ラオとは区別している点に注目したい。

なぜこのような混乱が生じたのだろうか。第一義的には、西洋人とタイ系言語を話す人々との接触が、ビルマ語世界を介したシャンから始まったことにある。それに加え、シャン系首長の政治単位の特徴も関係していると思われる。王朝時代のシャン地方はツァオパー/ソーボワのもとにいくつかの土侯国に領有されていた。ソーボワとは本来シャンの統合単位の長であるシャン語のツァオパーのビルマ語音訳で、ビルマ王朝と臣従関係を結んで以降の役

職をさしたが、シャン族以外の非ビルマ系民族の首長にも広く適用されていた。コンバウン史研究者渡邊渡佳成は、王朝時代のソーボワを、①ビルマ王に従属、②ビルマ世界の諸王ないし他の世界の王に従属、③どの王にも属さない、の三つに分類している［渡邊 1987: 146-147］が、共通するのは、ビルマ世界の中心からみた周縁的な「他者性」であり、その呼称がシャン語起源であることは、王朝時代のビルマ族にとっての「他者性」の表象が「シャン」のイメージを介していたことを示唆している。シャンのソーボワはビルマ王から見て「一本の傘さす諸侯」とされ、ビルマ王は「傘さす大国の王すべてを支配する王」であることを理想としていた［渡邊 1987: 136, 146-147］のである。

このような見方を、社会構造の観点から補強するのが、英国人類学者リーチ（E. R. Leach, 1910-1989）の議論である。彼は、シャンの人々の隣人たちの文化的多様性に驚嘆する一方で、居住分布圏がより広いシャンの文化的営みが均質的であることに着目し、その特異性は、シャンの経済的状況に起因するシャンの政治組織の均質性と関係すると分析する。すなわち、シャンの人々は、隣人たちを何世紀にもわたって同化させたが、河谷平野という環境を中心に展開する経済的状況の持続性こそが同化のパターンを類似させ、周辺の人々の文化的多様性に決定的な影響を及ぼすことはなく、またシャン文化そのものも、ほとんど変更されなかったと推測するのである［Leach 1977: 40-41］。その均質的な政治組織こそが、ツァオパーによる領域的統治だったのである。シャン地方の同統治方法は、1922 年の英領下でのシャン連合州（Federated Shan States）の成立を経て、ビルマ連邦独立後の 1959 年に、政府へのツァオパーの自治権譲渡という形で終焉を迎えるが、その時点でのツァオパーの数は、シャン系だけではなく、パラウン系のトウンペン・ツァオパーを含め 34 であった。その領域は、ケントゥンの 12,000 平方マイルから、20 平方マイルまで様々であり、シャン地方全体で統一的な「くに」版図が成立する政治的状況にはなかったことは明らかである。また同様な政治的統合は、19-20 世紀において、清（現中国）、シャム（現タイ王国）、フランス領インドシナ（現ラオス）の領内にも多種多様な形態で存在したことが確認されている。当時、ツァオパー間の系譜的つながりがあったことも知

られており、政治史的文脈においては、シャンという表現が、拡大解釈される蓋然性はあったことが認められるのである。

またタイ（Thai）人の思想家で、タイ（Tai）史研究者でもあったチット・プーミサック（Cit Phumisak, 1930-1966）が指摘するように、「タイ（Thai）人は、ビルマ人やタイヤイ族（ビルマのシャン族と同系統と考えられているタイ国内の人々〈筆者註〉）の近くに住んでいながら、「シャーン（翻訳のママ）」（Shan）という語を、西洋人を通じて知ったために、タイ（Thai）人一般は、「シャーン」というのはビルマのシャーン州のタイヤイのみを指す語だと理解しており、「シャーン」は、ビルマ語や英語その他の西洋語では、チャオプラヤー川流域とラオス国内を除く地域のすべてのタイ系民族を指すということを知らなかったし、「サヤーム」が、「シャーン」と同じ起源の語であることも知らなかった。また政治的社会的に限定されることなくすべてのタイ（Tai）系民族を呼ぶのに用いられるモン語の「セーム」も同じ語だということを知らなかったのである。」［チット・プーミサック 1992: 21–22］という。彼の指摘が妥当ならば、対外勢力による覇権抗争の中で、まがりなりにも王国体制を死守したシャム（現タイ王国、シャムは 1939 年まで国名）側が、西洋語世界におけるシャンへの領域拡大的な意味づけを認知していなかったことも、シャン（Shan）が広域的に活用され、タイ（Tai/*Tay*）と互換が可能であるという理解を訂正させるに至らなかった要因のひとつと思われる。さらにその後のタイ史研究に影響を与えた米国長老教会の福音伝道師ドッド（W. C. Dodd, 1857-1919）の *The Tai Race: Elder Crother of the Chinese* が 1923 年に出版されたことも、タイ（Tai/*Tay*）を最上位カテゴリーとするタイ化（Tai-ization）の黎明期に関係していると思われるが、より注目すべきなのは、彼が、タイ（Tai）を政治的・領域的単位ではなく、“Race”と呼んでいることから、「地域」ではなく「人」としてタイ（Tai）の輪郭を理解しようとしていた点である。

タイ王国人の歴史学者ルチャヤ（M. R. Rujaya Abhakorn）は、スコット、ドッドに加え、さらに英領インド軍中将フェール（Arthur Phayre, 1812-1885）の歴史観が、タイ（Tai）“Race”カテゴリーの確立に貢献したことを評価する一方で、シャンとタイとの間の用例の混乱ぶりと止揚の重要

性も指摘する [Rujaya 2000: 190-191, 197][4]。

現ミャンマー領土内に、タイ系言語を母語とする人々の流入のピークは、歴史学的に 13 世紀といわれている。上述した東南アジア大陸部の四大語族の中では、最後の移動集団であった。そのような歴史的背景が、現生活圏が、中国西南部、ラオス、タイ王国、ミャンマー、ベトナムに至るまで、現国境を跨いで連続的に塊状に拡がり、言語上の意思疎通も、他の語族よりも比較的容易であるという分布状況にもつながっている。さらに仏教信仰の共通性などを指摘する研究者もいる[Wijeyewardene 1990: 666-667]。

現ミャンマー国内で、シャンを自称であるタイ（Tai/*Tay*）に代えようという動きは、まったく聞かれない。ビルマ人がマジョリティを占める状況において、シャンの人々は、母語に加え、ビルマ語を操る、あるいは操ることを必要とされてきたのである。従って、シャンは、ビルマ語世界において、他称であるだけではなく、ビルマに対する自称としての性格も備えている、あるいは備えるべき状況に、シャン語を話す人々は置かれてきたのである。

ビルマ語世界におけるシャンの初出がバガン朝の碑文に認められることは、冒頭で言及した。他方、タイ（Tai/*Tay*））に関しては未確定な状況にある。その文脈で、逆に、起源的にはシャンが自称で、タイが他称だという説明も聞かれる。

上述の通り、西洋人のみならず、シャンの人々の隣人たちが、シャンの人々を、同一語源であるシャン（Shan）、サイアム（Siam）、シャム（Syam）などとして記録してきたことをシャン知識人自身も歴史的事実として受容している [Sai Aye Maung and Sai San Aik 2008]。19 世紀の資料にも、シャンの人々と交流があったことが知られているビルマ人のみならず、アッサムの人々やカチン族がサム（Sam）と呼んでいたという記録もある [Elias 1876]。モン語に関しては、チット・プーミサックの説明を先述した。従って、平易に考えれば、「シャン」に類したことばの起源が他称ではなかったという可能性を、完全には排除できないのである。

あるシャン知識人は、“Tai/*Tay* は他称が起源”という根拠として、中国系（広東）の人々が、南詔の時代に、中国国内に居住していたタイ系言語を話す人々を、「大＝Ta＝Tai」と他称していたという点を挙げる。この点につ

いては、中国語の意味としてドッドも記述している [Dodd1996: 341]。現中緬国境に住むタイ系言語を話す人々が、Pai-i（擺夷）という呼称を与えられていたことは、T'ien Ju-K'ang（1916-2006、田汝康）による研究以来、知られている [T'ien 1986]。それが宗教的実践、つまり Pai-Cults とも重なる（Pai は、ビルマ語で一般に祭事を意味するプエ/pwe と同語源である）。Pai-i は、擺夷であって Tai ではない。従って、Tai は、中国系住民との接触による比較的新しい呼称だと上述のシャン知識人はいう。その追加説明によれば、当時、Shan/Siam/Syam 類の呼称は弱体化して、元自称がビルマ語の文脈で他称化し、他方、中国語の他称が自称化していったというのである。その参考資料として、彼は、現在、ヴェトナムに居住するタイ系言語を話す人々が Tai/*Tay* に類した呼称で呼ばれていることを例示した。その背景にも中国語の文脈が介在しているというのである。

シャンとタイとの類別・併存・互換の動態に関しては、シャン語のみならず、ビルマ語、中国語、隣接語などを視野に入れた今後のさらなる文献調査が必要であることはいうまでもない。また初期のタイ（Tai/*Tay*）記録者が、キリスト教布教の文脈での活動であったことも改めて確認する必要がある。結果的に、彼らの言語圏が、分断ではなく塊状を成していたという状況が、西洋近代、特に初歩的な言語学的知識との接触により、タイ（Tai/*Tay*）の上位概念としての評価を促進させ、かつて 19 世紀に、広域的に用例の範囲が認められたシャンは、英領ビルマ内に居住するタイ系言語を母語とする人々に次第に限定されて、現ミャンマー国内での「他称」として定着していくことになるのである。

３．栄光の「くに」～遡及的な民族知の語り

語りのフレーズにおける「くに」とは、ビルマ語で「ピィ/Pyi」、シャン語で「ムアン/*Mäng*」である。従って、ビルマ語でシャン・ピィ（Shan Pyi）と表現され、シャン語でムアン・タイ（*Mäng Tay*）と表現される“シャンの「くに」”は、発言者が意識する時代において、独立した政治単位ではなかったことが、語りの含意である。とするならば、現在伝聞できるシャン族自身による“シャンの「くに」”についての語りは、過去の記憶、あるいは周辺の

人々との交渉の中で形成してきたある世界観からのイメージの産物ということになる。彼らが、タイ（Tai/*Tay*）を自称とし、その文脈で自分たちの「くに」をシャン語でムアン・タイと呼ぶ場合は、遡及的な文化圏的広がりのイメージが源泉にあり、シャンとしての自民族意識形成の一端をなしている。またビルマ語では、シャン地方に関しては、ピィに加え、山を意味するタウンを付したピィ・タウン（Pyi-Taung）という表現もしばしば聞かれる。ビルマ側にとって、シャン地方は、山地部に位置しているという理解が暗示されている。

ビルマ（ミャンマー）史において、「くに」と呼びうる政治的統合に関与した民族として、ビルマ人、モン族、そしてシャン族の名前を、ほとんどの歴史研究者は挙げる。モン族は、ビルマ人に先んじて現ミャンマー周辺に定着した人々であり、ビルマ人に仏教と文字を伝えた民として、ビルマ史において位置づけられている。他方、現在のシャン族につながるタイ（Tai/*Tay*）系言語を母語とする人々は、第一次ビルマ王国とビルマ側で評価されるバガン王国（1044–1287）末期、つまり移動のピークである 13 世紀からの動乱期に、北部の山地部を中心に、シャン系の諸勢力が興亡を繰り返して本格的にビルマ史に登場する。歴史的文脈においては、シャン側では、その約 250 年間がシャンの時代（1287–1531）として主体的に語られ、ビルマ側では、歴史的にシャン系の一部がインワ朝（1364–1526）支配連合体に加わったと、客体的に表現されている。

現中緬国境近くに、6 世紀から 16 世紀にかけて展開したとされるムアン・マオ（Mong Mao/*Mäng Maaw*/勐卯）王国の伝説は、栄光のムアン・タイを自負する民族知の歴史的核心である。シャンの年代記によれば、配下に 99 のムアンを従えたと伝承される現カチン州のモー・ガウン（Mo-gaung、シャン語でムアン・コーン/*Mäng Köng*）は、ムアン・マオ王国の重要拠点であり、「シャン」の「地域」としての広がりを想起させるが、その地理的位置は、現シャン州の外延である現カチン州に位置する。少なくとも近現代において、モー・ガウンは、シャン系統の人々にとってアンダーソンの「想像の共同体」[Anderson: 1991]の中心以上の存在としては、いまだに十分位置づけられてはいないのである。英国植民地下でのシャン諸州の行政府は、北部

はラショウに、南部はタウンジーに置かれ、その後のシャン連合州、独立後1962 年までのシャン州政府の自治地域も、地理的には現シャン州と重なる。換言すれば、現代ビルマ語のシャン・ピィの含意の中心は、現シャン州であり、シャン語のムアン・タイのそれは、遡及的なかつてのシャン王国、あるいは広くリンガフランカとして活用されたシャン言語圏の範囲を、対照的に想起させるのである。

シャンの年代記が伝えるムアン・マオ（別称 Mong Mao Long= *Mäng Maaw Long* /勐卯弄-果占壁/Kawsampi-Ko Shan Pyi）王国は、ツァオパーがツァオ・ツォーカンパー（Sao Hso Hkan Hpa/*Caw Sä Khan Phaa*/思翰法/思可法）の時代に、モー・ガウンを建設し、アッサム地方への遠征を成功させ、その版図は最大となる。兄王を支援したにもかかわらず、死を賜った悲劇の英雄である弟ツァオ・サムロンパー（Sao Sam Long Hpa/*Caw Saam Long Phaa*/思翁法）、別名ツァオ・サム・ター（Sao Sam Tar/*Caw Sam Taa*/混三弄）、あるいはツァオ・サムロン（Sao Sam Long/*Caw Saam Long*）は、死後、モー・ガウンの守護神として祀られた。その祠は、エーヤーワディ川の支流モー・ガウン川の畔に建立されている。また同市郊外に位置する伝説の王宮跡にも、シャン系の人々によって英雄の偶像が建立されたが、土塁の周囲に日常的に居住するのはカチン系の人々である。従って、忘れられた遺跡以上の何物でもなく、ビルマ人・ビルマ文化中心主義が通底するミャンマーの民族知の構図では、当初は偶像が手にしていた剣が杖に変えさせられた事実に象徴されるように、周辺の学術的な調査研究もままならないのが現状である。

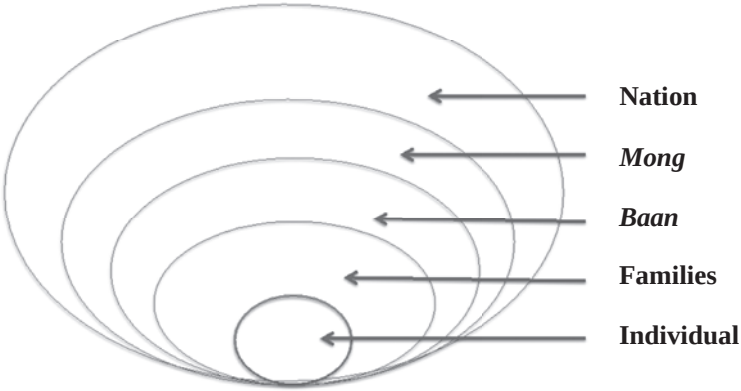
シャンの代表的な知識人で、米国で修士号を取得し、シャン史に関する大部な著作、*History of the Shan State: From Its Origin to 1962* を出版したシャン史家サイ・アウン・トゥン（Sai Aung Tun）は、シャンの政治単位として次頁の図式を引用する。ケントゥンのケン（あるいはチェン）とセーなども付記されているが、その上位概念は、ムアンであり、そして大ムアンが、西洋近代の「知」の文脈ではネイション（nation）に相当すると解釈している。1962 年とはネー・ウィン（Ne Win）による軍事クーデターをさす。

他方、ビルマ語は、王朝時代に遡って、政治単位に関する語彙が、サイ・

アウン・トゥンが言及するシャン語より豊富である。対照的に、下段にその概略を併記してみる（英訳は、クッシングのシャン語・英語辞典、及び現ミャンマー国語委員会編集の緬英辞典による）。

The Tai Social System

Individual → Families → *Baan* → *Se, Mong, Keng* → States → Greater *Mong* or Nation



[Sai Aung Tun 2009: 26]

	シャン語	ビルマ語
「むら」	バーン（*Baan*）	イワ（*Ywa*/Village）
「まち」	セー（*Se*/province/district） ムアン（Mong/*Mäng*） ケン（チェン）（*Keng*/used only in names of towns, cities and provinces）	ミョウ（*Myo*/town/city）
「くに」	ムアン（Mong/*Mäng*/	ピィ（*Pyi*/country/royal city）

	country, land, large city)	ナインガン （*Naingngan*/sovereign state） タイン（*Taing*/division）

ビルマ語のピィは、かつての王都という意味もあり、ナインガンは王が統治する領域とされていた。ミョウもまた同様で、王朝時代に、ツァオパー/ソーボワの下位に、ミョウ・ザーという位階があったことが知られている。現代の用例では、ナインガンは政府が統治する領土を意味し、現憲法に規定された行政単位では、連邦国家を構成する、主要七民族が冠称となっているピィネ（Pyine）が州（State）、平地中央部に位置するタイン・データ・ジー（Taing Detha Gyi）が地方域（Region、かつては Division）とされ[Republic of the Union of Myanmar 2008]、王朝時代も現在も、ビルマ語には、文脈において使い分けることのできる複数の用語があるのである。

ビルマ語の「くに」に該当することばと対照的に、シャン語では、ムアン（一部セー、ケン、あるいはチェンが使われているが）が「まち」レベルでも「くに」レベルでも活用されている。それだけではない。タイ王国西北部のメーホンソーン県に住むシャン系の人々の移入の歴史は、過去遡って二百年前後に留まるが、同県で 1970 年代後半から 1980 年代にかけてフィールドワークを実施した先述のターネンバームが指摘しているように、「むら」の守護神は、チャオあるいはツァオ・ムアン（*caw mäng*）と呼ばれており、その霊的領域は「むら」にあたるバーン、あるいは同語源のワーン（*baan/waan*）ではなく、ムアンと称されることが特異的である [Tannenbaum 1990: 33]。従って、ムアンとは、ツァオパーを中心に、領域を支配下に置く「くに」的存在というよりは、様々な領域レベルの居住単位に多義的に使われてきたのである。

ムアンの多義性は、ムアン以上の政治的統合を、タイ（Tai/*Tay*）系の人々は，前近代において構築することができなかったことを暗示し、それ故に、西洋近代由来の政治用語を使っても、Greater Mong/*Mäng* or Nation とせざるを得なかったと考えられるのである。ムアン（*Mäng*）の多義性は現代でも認められる。現タイ王国でも、国礎柱を、ムアンを使って表現している

（サーン・ラック・ムアン/Bangkok Ciy Pillar Shrine）一方で、地方、あるは村落レベルでのムアンの用例も継続的に認められるのである。

４．現代の「くに」～現実的な民族知の語り

ミャンマーにおける現在のシャン族によるシャン化（Shan-ization）を促進する民族表象は、シャン州を中心に展開している。行政単位を超える活動も、カチン州、ザガイン地方域などで認められるが、「地域」としての「シャン」への帰属意識はシャン州内に留まっているのである。

シャン州は、現代ビルマ語で シャン・ピィネ（Shan-Pyine)、シャン語でツァン・タイ（*Cüng Tay*）と呼ばれている。ただし、ピィネというのは、上述のように行政用語である。口語レベルではシャン・ピィ、文字通りシャン地方、あるいはシャンの「くに」のイメージが発話者にあるのかもしれないが、ビルマ語の文脈では、かつての栄光の大ムアンのようにカチン州、ザガイン地方域を含むイメージはおそらくない。

シャン語でのムアン・タイの外延を、ネイション（nation）概念の外延からたどってみる。

ネイションは多義的な意味領域を擁し、和訳すると「国家」「国民」「民族」などに文脈によって該当する。いうまでもなくネイション概念も西洋近代由来であり、国民国家形成の過程で「くに」の輪廓形成に影響を及ぼした。国民国家体制を構成する要素は、隣国との間で境界が了解された領土、多かれ少なかれ同質性を帯びるあるいは帯びることが期待される人々すなわち国民、そしてその国民の代表者となり、政治権力を有する政治組織すなわち政府の三つである[Rothermund 1997: 1]という定義にあるように、「領土＝地域」と「国民＝人」の要素は必須である。

多民族国家ミャンマーにおいて、上述の第三の要素、すなわち「政治権力」の覇権をめぐって、独立前後から長い間、武力闘争が続いてきた。マジョリティであるビルマ人を中心とする軍事政権と反政府運動側との対立である。その後者の側の英語での正式名に、ネイション表現（実際にはナショナル、National）が下記のように極めて多数認められる。

“National”を使う組織

Arakan National Counicl/ Arakan Rohingya National Organization/ Chin National Front/Karenni National Progressive Party/ Karen National Union/ Mon National Liberation Army/National League for Democracy/National Socialist Council of Nagaland/Pa-O National Organization/Rakhine National Party/Shan Nationalities Democratic Party/ Shan State National Army/ Ta’ang National Liberation Army/ Wa National Army/ [Mikael Gravers and Flemming Ytzen 2014: 425-427]

組織名の〈“民族”名と National〉の冠称の意図に、「人間集団」の民族的属性を基盤に「地域」の領有をめざし、かつ政府に対抗して、ある程度の「政治権力」を統べる力関係の構図と権力闘争の文脈を見出すことは容易であろう。ネイション史、及びナショナリズム論を展開する植村和秀は、次のように分析の枠組みを提示している［植村 2014］。

> ネイションとして形成される形は、関係者の自明性への欲求を吸収しつつ、実際には歴史の中で変化していくものであること。その形成される単位には、大きく分けて人間集団単位と地域単位があること。そしてその形成に際しては、形成される単位をめぐるせめぎ合い、ネイション以外の何かとのせめぎ合いがよくあることです。・・・・・ ネイションとは、・・・・・その実態は巨大な人間集団に他なりません。そしてより詳細に言えば、土地を持ち、その土地の上に文化的なものや国家的なもので歴史的に形成され、ネイションへの意識と意欲が目覚めてネイションとして広く強く認知されたもの、となります。・・・・・地域単位のネイション形成では、そこに暮らす人々が地域の色に染められていきます。これに対して人間集団単位のネイション形成では、人間集団が自分たちの暮らす地域を自らの色に染めようとしていきます。・・・・・ここで分けているのは、どちらが形成の主流となったかを示すためであり、実際のネイション形成では両者が複雑に関係していきます[植村 2014: 16-17, 35-36 ,94]。

なお植村も述べている通り［植村 2014:18-20]、「人間集団単位」と「地域単位」という区分は、あくまでも議論を明晰にするための分析上の枠組みであり、本論考においても、どちらかのカテゴリーに分類することが目標ではない。

概念的に比較するならば、ビルマ人が主導する政治的統合は、特に近現代において、人間集団単位のネイション形成であったように思われる。マイノリティ・マジョリティの双方をビルマ化（Burmanization）することによって、植村のいう自らの色（ビルマ語世界）に地域を染めようとしてきたのである。ボッシュエ（Carol Ann Boshier）によると「ビルマ化」ということばは、植民地期後半に共通して使われるようになるが、初出は、スコット他編の地誌だという［Boshier 2016: 297]。換言すれば、ビルマ化は、植民地被支配の経験を仲介として、西洋近代由来のネイション形成の文脈で、事象化してきたことになる。20 世紀前半に英領ビルマとして分離され、独立を経て本格化するビルマ化で地域を染めようとする施策は、ビルマ化を、多民族国家建設の柱に据えたことを意味する。現国家名も、ビルマ化の延長線上にある。

現在、シャンの人々が、自らの「色」ともいうべき自民族意識の中心に置いているひとつが、シャン文字である。その変遷を、一次資料を発掘して丹念にたどるサイ・カム・モン（Sai Kam Mong)による起源論・伝播論［Sai Kam Mon 2004]は、シャン文化史研究の重要な研究成果である。ただし、この点に関して歴史学者クリスチャン・ダニエルズ（C. Daniels）は、15 世紀初頭のタイ/*Tay*（シャン/Shan）文字へのビルマ文字表記法の影響［Daniels, Christian 2012］を指摘し、シャン文字起源論に一石を投じている。かつて筆者は、シャンが、ビルマ世界、及びその政治的統合、あるいはビルマ語世界に取り込まれていく過程を「シャンのビルマ化（Burmanization of the Shan)」と呼んだ［髙谷/ Takatani 1998、2007、2008]。シャンのビルマ化は、「文化」概念などの理念的な領域から、文字表記法のような「文化」の表象面に至るまで、民族表象と文化動態の通奏低音となってきたと考えられる。

地名にもビルマ化の影響が認められる。栄光の「くに」の舞台と伝えられる現カチン州のモー・ガウンという地名が、シャン語ムアン・コーン由来であることは上述した。つまりモー（Mo）は、タイ系言語を母語とする人々に共通する生活単位であるムアン（*Mäng*）と同語源なのである。

ビルマ語版のカチン州、及びシャン州の地図に認められるある特徴については、筆者はかつて指摘したことがある。第一に Mo と綴られる地名と、ムアンつまり *Mäng* に音が近い Maing という綴りで表される地名とが二通りあること。第二に、Mo と綴られる地名はカチン州、及びシャン州の西側に限定されること。そしておそらくもっとも重要な点は、事実上モー・ガウン、モー・ニィン、モー・ゴックなどのモーで始まる地名は、王朝時代よりビルマ宮廷と関係の深かった場所であることである。これらの地名は、政治的力関係からして、王朝時代以降、ビルマ化がより進行したことが十分予想される場所なのである［髙谷 1998、2008］。言語学者澤田英夫によれば、末子音が脱落したビルマ語のモーにも、シャン語のムアンにも、単独で「くに」という意味がなく、末子音の消失によって生じたと考えるのが妥当だという［澤田 2011］。従って、この点も、シャンの人々の間で、事実上、ムアンが「くに」として概念化していなかったことの証左でもある。

他方、シャンは、通時的に、地域単位（ツァオファー中心の傘）を、ネイション形成の基盤にしてきたと考えられるのではないだろうか。シャン地方は、シャン語をリンガフランカとしてシャン語圏を成立させ、全体領域としては、多孔質的に地域の色に染められていったと推測される。先述したリーチの仮説を参考にすれば、環境や経済的状況を反映した地域の色であって、シャン文化の色ではなかった。英領時代までのシャン化は、非タイ（シャン）系の人々をシャン文化圏（Shan Cultural Area）の中に取り込む一定の求心性を有するに留まったのである。だからこそシャンの隣人たちは、リーチが述べているように、多様な文化的営みをそれぞれ保持してきたのである。このようなムアンの複数の傘が併存し、力学的関係がその盛衰に影響する構図は、タンバイア（S.J.Tambiah, 1929-2014）が提唱した銀河系政体（Galactic Polity）[Tambiah 1976]に相当する。ムアンの外延は、地域の境界ではなく、中心によって規定されていたのである。その構図は、1959 年の全ツァオパーの自治権返還、1962 年の軍事クーデターによるツァオパーの拘束とシャン州自治政府の廃止まで継続してきたともいえるのである。

筆者は、シャンのビルマ化に関して、マジョリティ側であるビルマ語世界の言説が優越する文脈において、シャンが周縁的に表象されてきたことを指

摘する一方で、ビルマ化の背後で独立以降に事象化する「シャンのシャン化(Shan-ization of the Shan)」に関して、近代的な「くに」建設を達成できなかったシャンの人々によるシャン化は、独立以降、かつてのようなシャン化ではなく、タイ系言語を母語とする人々が中心的主体となるシャン化に留まらざるをえなかったと解釈した[髙谷/Takatani 1998、2007、2008]。その意味で、上述した地域単位のネイション形成は、〈原初的〉シャン化であり、植民地時代を経験する過程で、次第に人間集団単位のネイション形成に移行していったと考えられるかもしれない。その契機のひとつが、すでに指摘したタイ系言語を基準とするカテゴリー化であるタイ化（Tai-ization）であり、近現代におけるタイ言語圏内の比較軸の主導役を果たしたのが、二つのタイ化（Tai-ization/Thai-ization）に関わるシャム（タイ）王国（Siam/Kingdom of Thailand）の存在である[Dodd 1966、Wijeyewardene 1990]。

シャム（タイ）王国によるこのような人間集団単位のネイション形成は、ミャンマー・タイ国境を跨いでタイ国内に移住してきた現メーホンソーン県内のシャンの人々にも影響を与えている。そのような移住経歴を有する村落をフィールドワークしたマクレーン（Maya McLean）は、タイ王国に同化するタイ化（Thai-ization）と、故地であるシャン州に思いを馳せるシャン化（Shan-ization）が併存していると分析した [Mclean 2012]。

1966 年に出版された雑誌のシャン語記述に〈３０タイ（Tai）〉という論考がある。人々のカテゴリー名 30 は、全てタイが冠称となっている。その中に、タイ・パオー（Tai-Pao）、タイ・ヤン（Tai-Yang）、タイ・リス（Tai-Lisu）、タイ・ラワ（Tai-Lawa）などの名称が含まれている[SPYS1966:46]。あたかもシャン、あるいはタイという接頭辞が、「人」あるいは“民族”という意味を与えられているかのようである。レナード（R. D. Renard）の指摘も、その考え方を補強しており、「タイ（Tai/*Tay*）」あるいは「カー（Kha/*Khü*）」を、現代の民族学的、および言語学的基準とは異なる方法で自民族観を展開していたことを示す社会的な指標とみなしている[Renard1997:175-177]。ちなみに、タイ・ヤンのヤンはカレン（カイン）である。ラワはモン・クメール系の言語を話す人々である。〈３０タイ（Tai）〉は、タイ系言語を母語とする人々以外も数多く含んでいることが留意に値する。

歴史家の考察によると、〈３０タイ(Tai)〉の枠組みの端緒は、コンバウン期の王統治様式にある。当時、ビルマ宮廷側による支配下に対する人間集団理解は、計 101 の「人」であった。ビルマ史家伊東利勝は、ビルマ系 7 種、タライン(＝モン)系 4 種、シャン系 30 種、カラー（≒インド系[5]）系 60 種という分類は 19 世紀のものとみなしている［伊東 2015］。カレン、カチン、チン、タヨッ（ビルマ語の“中国系”に対する呼称）など、現在では、別“民族”として理解されているものを、19 世紀の史料も、1960 年代のシャン語の論考でも含んでいるところをみると、伊東の評価のように、この全体を総べるタイ（シャン）とは、「人」のカテゴリーではなく「地域」のカテゴリーであったといえよう。その文脈は〈原初的〉シャン化なのである。

翻って考えれば、現在からの過去の「くに」への遡及的語りは、近代国家観を前提に、人間集団単位で、過去を遡及せざるをえない。少なくとも、近代において、ネイションに相当する人間集団単位の「くに」を、シャンの人々が形成できなかったことは事実である。従って、ネイションとしての意識は、西洋近代の「知」の影響下で覚醒したとしても、ビルマ化（Burmanization）の文脈、換言すれば、マジョリティである“対ビルマ意識”の介在抜きで、自らの歴史を語るには至らなかったのである。

現在、ミャンマーでは、〈原初的〉シャン化を経験してきた元「隣人たち」が、人間集団単位を基盤に、「ネイション的地域」の合法化を達成している。2008 年に交付された新憲法により、ダヌ、パオー、パラウン、コーカン自治地域（Self-Administered Zone）、ワ自治地区（Self-Administered Division）のシャン州内設置が、新たに認可されたのである[Republic of the Union of Myanmar 2008]。いずれも反政府運動の過程において、軍事的に有力だった組織を背景としており、政府による政治的懐柔を意味することはいうまでもないが、両者の間の休戦協定の行方は不透明である。

総じて、現ミャンマーにおけるシャン民族知の構築・再構築の構図では、ツァオパー中心の〈原初的〉シャン化の地域単位の“伝承”、シャン州を場とする人間集団単位のシャン化、主に言語学的知識を根拠としたタイ化(Tai-ization)による共属意識醸成が、国境を跨いで並行して事象化しているといえるだろう。タイ化の代表的な表象としては、各種イベントに登場する

ファッションショーやカレンダー写真における自“民族”衣装の可視化が挙げられる。そこで纏われる衣装は、シャン州在住のサブ・グループのみならず、タイ王国、ラオス、中国雲南などの同胞のものも含まれ、その「地域」は現国境を跨ぎ、かつての栄光の「くに」を、見る「人」に想起させうる。しかし現実的には、近代的な意味での「くに」＝Nation には、なりえない。ショーや歳が終われば、国境と州境の存在が再実体化するのである。

５．“シャンの「くに」の語り”と西洋近代

「自分たちシャン族は、ビルマ人のような『くに』がない民なのだ」再考作業に戻る。少なくとも二つの解釈が成り立つように思われる。一方で、彼には、伝説の王国の虚構性が見えていたのかもしれない。他方で、近現代における歴史的事実として、シャン族は「くに」を形成することがかなわなかったことを認めている。対照的にタイ（Tai)系言語を母語とする人々の間では、タイ王国という近代的な国民国家を構築できたが、シャン族の人々には実現できなかった。前者の伝説の王国の評価の是非にかかわらず、後者の意味では、彼自身が、確かに、ネイションという概念的な枠組みで「くに」を把握していたといえるのではないだろうか。「くに」に関する民族知は、近代の文脈から逃れ得ない。

他方、シャン知識人の語りの明示的な比較軸になっているのは、ビルマ人の歴史観に対する評価である。その代表的表象は、ビルマ族が建てた三大王朝の英雄がセットになった偶像化である。ビルマ族最初のバガン王国のアノーヤター（Anawarahta、在位 1044-1077)王、第一次タウングー朝（1486～1599)の外征の英雄バインナウン（Bayinnaung、在位 1551-1581）王、コンバウン朝(1752～1885)の開祖アラウンパヤー(Alaungpaya、在位 1752-1760)王の三王である。第二次世界大戦の戦火で消失したマンダレー王宮の再建は、1990 年代から行われてきたが、歴史的記録の乏しいバインナウン王が都をおいたバゴーの王宮、アラウンパヤーの故地シュエボーの王宮の再建も、マンダレー王宮を模して行われた。渡邊佳成の考察のように、国家統一を成し遂げた王朝の栄光を歴史の中に求めるというのはビルマ人中心の歴史解釈を促進し、多民族国家のイデオロギーと矛盾することになる[渡邊 1997]。歴史学

的根拠が未確定であったとしても、ビルマ人の遡及的な歴史観は、近代的な歴史観の文脈で、過去の栄光と現在の権力関係における優位性と連携し、多民族国家を構成するマジョリティとしての自己主張の根拠にもなる。それと対照的に、シャンの「くに」は、過去の栄光に留まっている。その現代的文脈における再構築は、想像上では不可能ではないが、現実的に、1959 年の自治権返還直前の多数のムアンの併存状況は、シャンの「くに」としてのかつてのまとまりを、説得力に欠け、虚構性の濃いものにしている。本論考で端緒としてきたシャン知識人の「くに」の語りは、西洋近代由来のネイション概念の影響を感じさせる一方で、栄光の「くに」の存在を根幹とする“民族”起源神話による共属意識醸成のある種の限界を想起させる。

タイ言語圏において、王国の国家体制を堅持し、国民形成をリードしたのは、1930 年代末から 1940 年代初頭に政権を掌握したピブーン首相である。彼は、全国民をタイ人化することを文明化と考え、その文脈で国名をシャム（サヤーム）からタイ（プラテート・タイ）へ変更し、並行して 19 世紀前半から本格化した西欧の東南アジア進出の結果、割譲を余儀なくされた失地回復を宿望していたといわれている[村嶋 1996: 228-244]。米国歴史学者ワイアット(David K. Wyatt、1937-2006)は、その施策のナショナリズム的特徴を、“Thailand for the Thai”と呼ぶ[Wyatt 2003 (1982): 243]。他方、ビルマ（ミャンマー）国内のシャン族のその政治的文化的担い手としての位置づけは、タイ・ロン（Tai-Long、文字通り大タイ)という自称にもかかわらず、タイ言語圏において、現実的にマイノリティとなってきたことは否定できない。そのことが現ミャンマー国内におけるシャン民族知の当事者意識を、逆説的により強化する背景になっていると思われる。彼らは、ビルマ連邦独立時に、現タイ王国編入ではなく、ビルマ連邦参加を選んだ人々の末裔なのである［髙谷 2008: 10]。従って、伝説の“シャンの「くに」”をめぐる言説は、二つの文脈でのマジョリティを対抗的に意識しながら、あくまで西洋近代との接触以前に関する遡及的な語りの民族知においてのみ活かすことができるのである。本論考で参照したサイ・アウン・トゥンによるシャン通史の大作も、1962 年までで、しかも同年に勃発した軍事クーデターに関しては、その事実関係のみ記述されている。遡及的な語りと、現シャン州とシャン族が置

かれている状況とが、政治的配慮からだろう、連続してはいないのである。シャン文字の起源論・伝播論を展開するサイ・カム・モンの労作も、シャン伝統文化研究の枠内に留まっている。逆に、政治的配慮を必要としない場合は、対照的に、主に近代のツァオパー制が機能していたシャン諸州の記憶から語り始め、1959 年のツァオパー自治権返還、1962 年の軍事クーデターを経てきた時代を回想して、反軍事政権の立場から、政府の統制外の国外で出版される傾向があり[Chao Tzang Yawnghwe 1987、Sargent 1994、アダムス 2002、Elliot 2006、Sao Sanda 2008]、やはりシャン族の栄光の「くに」の過去と現在の語りは、連続していないのである。自負の源泉を過去に求める遡及的な語りと激動の時代を描く現実的な語りの間に、明らかな境界がある。

では筆者がカチン州で出会ったシャン知識人の語り「自分たちシャン族は、ビルマ人のような『くに』のない民なのだ」はどうだろうか。彼は過去の伝説の王国も把握している。現在の状況も冷静に理解している。換言すれば、その語りの含意は、シャン族の過去と現在の両方の「くに」をめぐる状況に整合し、シャン族としての「くに」の自画像が、連続しているようにも解釈できるのである。前近代のムアンは、抽象的な政治的統合の概念ではなく、地域名とセットになる現実的な生活単位だったのであり、その時代においても、そして現在においても、ビルマ人のような「くに」を、少なくとも同時代的にシャン族は建てることができなかった[6]。従って、語りは、一見、消極的な特徴を帯びているが、実は、冷静な通時的歴史観に裏付けられていたのではないだろうか。

総括する。シャン言語圏の地域において通時的に認められるのは、ビルマ人に対抗的な「くに」を建てる権力集中には必ずしも至らず、シャン文化に周辺民族を同化しなかった、できなかった、あるいはリンガフランカ言語文化圏をより実体化できなかった事象である。一方、その他のシャン族の隣人たちは、近現代の多民族国家建設の過程において、ネイション概念に触れ、独自の「くに」の実現可能性に覚醒したことが、結果的に、現シャン州他の混迷状況を招く要因のひとつとなっている。

なお、ムアンという政治的統合が、タイ（Tai/*Tay*）（シャン（Shan））に特有な構造とみなすのは早計であろう。リーチが環境に注目したように、地

域の生態的・経済的状況と、前近代、さらに西洋近代との邂逅と交流の過程を考慮する必要がある。また概略的に扱ってきた西洋近代の「知」に関しても、より具体的な文献調査が求められる。それらの議論はこれからである。

近現代における「くに」をめぐる言説は、その歴史が国家レベルでマジョリティ側から優勢に語られる限り、民族的言語的、そして宗教的な文脈におけるマイノリティ側の「くに」の語りに、統制的な影響を与えてきたことは確かである。西洋近代の「知」との邂逅と交流により輪廓を与えられたシャン民族知も、王朝時代に遡るビルマ語世界の影響下で、ビルマ側の言説との力関係を意識化しながら、構築・再構築を繰り返してきた。ミャンマーにおける「くに」をめぐる言説を含む民族知の行方は、当該地域の政治的経済的状況を基盤に、マジョリティとマイノリティの力関係を軸としながら、これからも多様に事象化されていくのである。

---

[1] 本論考は、第 44 回中国・四国地区研究懇談会中四国人類学談話会（2015 年 11 月 7 日 RCC 文化センター ）での発表内容に加筆修正したものである。当日、コメントなどをご提供下さった出席者の皆様に、この場を借りて心より感謝のことばを伝えたい。いうまでもなく、論考の文責は筆者にある。

本論考のビルマ語とシャン語の用語は、基本的にカタカナ表記とし、学術的利便を考慮しローマ字表記を併記している。ビルマ語のローマ字表記は、1987 年に東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所で作成された表記一覧に一部修正を加えた方式を、シャン語のローマ字表記は、2000 年に同研究所新谷忠彦教授によって考案された方式を、それぞれ原則的に採用している。シャン語のローマ字化は、斜体で区別している。ただし、一部は慣用に従い、音調については省略した。なお、タイには、Tai/*Tay* と現タイ王国名の Thai があり、日本語のカタカナ表記での区別は難しい。従って、必要に応じてローマ字を付記して明示する。

[2] 本論考では、民族論的状況で帰属を問題にする場合、同じ「族」ではなく、相対的に大規模社会を構成する支配的な「ビルマ人」と、小規模社会を構成する「シャン族」「カチン族」「モン族」などとに使い分ける。

[3] ただし、その活動は、ビルマ史・ビルマ文学研究に限定され、植民地経営に抵触しかねないような政治と経済に関する議論は禁止されていたようであ

る［Boshier 2016: 314］。

[4] 彼からは、シャム（タイ）王国内において、Tai- という「人」の分類方法が用例として確認できるのは、1930 年代以降だろうとの情報提供を、個人的に頂いた。タイ語文献での検証は今後の課題である。

1930 年代以降といえば、“全国民タイ人化”を掲げたピブーン首相の時代に連なる［村嶋 1996： 227-228］。彼が打ち出した施策の方向性は、当時経済的優位にあった中国人対策であり、人間集団単位の“新たなネイション”形成に関しては、チャオプラヤー河流域の前近代シャムの境界を越えて、広くタイ（Thai/Tai）系言語を話す人々を包括する方針でもあったと考えられている［Wyatt 2003: 243］。

[5] カラーの意味領域については議論が多い。いわゆる西洋人も含まれる場合もある。ここでは、簡単に“インド系”としておくが、「西から来た」というニュアンスもあることを付記しておく。

[6] 13 世紀から 14 世紀にかけての時期が、時に“Tai Century”として形容され、[Kirigaya 2015]、あるいは 13 世紀から 16 世紀が“Shan Hegemony”としてシャン史家に評価されるように [Sai Aung Tun 2009: Chapter 3]、ビルマ人と覇権を争った時代があったことは事実だが、中国史も考慮した上でのその歴史の実像に関しては、研究者間で論争が続いている。

参考文献

アダムス、ネル（Adams, Nel）2002『消え去った世界～あるシャン藩王女の個人史（*My Vanished World*）』森博行訳、文芸社.

Anderson, Benedict 1991 *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso Editions.

Boshier, Carol Ann 2016 " "Burmanization" and the impact of J.S. Furnivall's Views on National Identity in Late-Colonial Burma", *The Journal of Burma Studies* 20-2: 291-333.

Chao Tzang Yawnghwe 1987 *The Shan of Burma: Memoirs of a Shan Exile*, Institute of Southeast Asian Studies.

チット・プーミサック（Cit Phumisak）1922『タイ族の歴史～民族名の起源から』（坂本比奈子訳）　勁草書房.

Cushing, Josiah Nelson 1914 *A Shan and English Dictionary*, Rangoon: American Baptist Mission Press. (2nd, orig. 1881)

Daniels, Christian 2012 "Script without Buddhism: Burmese Influence on the TAY (SHAN) Script of Mång2 Maaw2 as seen in a Chinese Scroll Painting of 1407", *International Journal of Asian Studies* 9-2: 147-176.

Department of the Myanmar Language Commission (ed.) 1994 *Myanma-Ingalei Abeidan (Myanmar-English Dictionary)*, Ministry of Education, Union on Myanmar.

Dodd, William C. 1996 *The Tai Race: Elder Brother of the Chinese*, White Lotus. (orig. 1923)

Elias, Nay 1876 *Introductory Sketch of the History of the Shans in Upper Burma and Western Yunnan*, Calcutta: The Foreign Department Press.

Elliot, Patricia W. 2006 *The White Umbrella: A Woman's Struggle for Freedom in Burma*, Friends Books.

Gravers, Mikael and Flemming Ytzen (eds.) 2014 *Burma☆Myanmar:*

Where Now? The Nordic Institute of Asian Studies Press.
伊東 利勝 2015「前近代ビルマ語世界における「百一の人種」について」『文學論叢』（愛知大學文學會）151: 1-33.
Kirigaya, Ken 2015 "The Early *Syam* and Rise of Mäng Mao: Western Mainland Southeast Asia in the 'Tai Century' ", *Journal of the Siam Society* 103: 235-268.
Leach, Edmund Ronald 1977 *Political Systems of Highland Burma: A Study of Kachin Social Structure*, Athlone Press. (orig. 1954)
Lebar Frank M. et. al. 1964 *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia*, HRAF Press, New Haven.
Luce, Gordon H. 1958 "The Early Syam in Burma's History", *Journal of the Siam Society* 46:2-123-214.
Maung Tin, B. A. 1911 "The Life of Judson in Burmese", *Journal of the Burma Research Society* 1-2: 51-52.
——————— 1912 "The Life of Dr. J. N. Cushing", *Journal of the Burma Research Society* 2-2: 239-240.
McLean, Maya 2012 *Dress and Tai Yai Identity in Thoed Thai, Northern Thailand*, Studies in the Material Cultures of Southeast Asia No.18, White Lotus.
村嶋 英治 1996『ピブーン–独立タイ王国の立憲革命』現代アジアの肖像９, 岩波書店.
名和 克郎 1992「民族論の発展のために–民族の記述と分析に関する理論的考察」『民族学研究』57-3: 297-317.
Phayre, Arthur 1996 *History of Burma including Burma Proper, Pegu, Taungu, Tenasserim, and Arakan*, Augustus M. Kelley Publishers. (orig. 1883)
Renard, Ronald D. 1987 "Minorities in Burmese History", *Sojourn* 2-2: 255-271.
Republic of the Union of Myanmar 2008 *Constitution of the Republic of*

the Union of Myanmar, Printing & Publishing Enterprise, Ministry of Information.

Rothermund, Dietmar 1997 "Nationalism and the Reconstruction of Traditions in Asia", Sri Kuhnt-Saptodewo et. al. *Nationalism and Cultural Revival in Southeast Asia*, Harrassowitz Verlag, pp.13-28.

Rujaya, Abhakorn, M. R. 2000 "The Fabrication of Ethnicity and Colonial Polity East of the Thanlwin", Universities Historical Research Centre (ed.) *Myanmar Two Millennia* Part 4: 186-200, Proceedings of the Myanmar Two Millennia Conference 15-17 December 1999.

Sai Aung Tun, U 2009 *History of the Shan State: From its Origins to 1962*, Silkworm Books.

Sai Aye Maung and Sai San Aik 2008 "Understanding the word – SHAN", *Indian Journal of Tai Studies* 8: 125-129.

Sai Htwe Maung 2007 *History of Shan Churches in Burma (Myanmar) (1861-2001).*

Sai Kam Mong 2004 *The History and Development of the Shan Scripts,* Silkworm Books.

Sao Sanda 2008 *The Moon Princess: Memories of the Shan States,* River Books.

Sao Tern Moeng 1995 *Shan-English Dictionary*, Dunwoody Press.

Sargent, Inge 1994 *Twilight over Burma: My Life as a Shan Princess,* University of Hawaii Press.

澤田 英夫 2011「カチン州のタイ系起源地名覚え書き」 Fujishiro Setsu & Shogaito Masahiro (ed.) *Dynamics of Eurasian Languages- II: Studies on Language in Multilingual Areas*, (Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) series vol. 17) Kobe City College of Nursing, 2011.6, pp.127-152.

Scott, J. G. and J. P. Hardiman (comp.) 1900-1901 *Gazetteer of Upper*

Burma and the Shan States, 5 vols, Governmental Printing Burma.

Shan Pyine Yinkyei-hmu Sazaun (SPYS) (ed.). *Shan Pyine Yinkyei-hmu Sazaun* (シャン州文化雑誌). (in Bamar and Shan)

新谷 忠彦・Caw Caay Hän Maü 2000『シャン(Tay)語音韻論と文字法』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Shway Yoe 1910 The Burmans: His Life and Notions, Macmillan and Co., London. (orig. 1882)

TAKATANI, Michio（髙谷 紀夫）1998「シャンの行方」『東南アジア研究』35-4: 38-56.

――――― 2007 "Who are the Shan? An Ethnological Perspective", Mikael Gravers (ed.) *Exploring Ethnic Diversity in Burma,* The Nordic Institute of Asian Studies Press, pp.178-199.

――――― 2008『ビルマの民族表象–文化人類学の視座から』法藏館.

――――― 2012 "An Anthropological Study of Dr. J. N. Cushing's Dictionary", The Central Committee of the Shan Literature and Culture Association (ed.) *The Cultural Heritage of Tai (Shan)* pp.81-90, n.p.

Tambiah, S. J. 1976 *World Conqueror and World Renouncer: A Study of Buddhism and Polity in Thailand against Historical Background*, Cambridge University Press.

Tannenbaum, Nicola 1990 "The Heart of the Village: Constituent Structures of Shan Communities", *Crossroads* 5-1: 23-41.

――――― 2009 "Thai Yai, Shan, and Tai Long: Political identity across state boundaries", *Asian Review* 22: 3-22.

T'ien Ju-K'ang 1986 *Religious Cults of the Pai-i along the Burma-Yunnan Border,* SEAP Monograph, Cornell University.

植村 和秀 2014『ナショナリズム入門』 講談社.

渡邊 佳成 1987「ボードーパヤー王の對外政策について～ビルマ・コンバウン朝の王權をめぐる一考察」『東洋史研究』46-3: 129-163.

Wijeyewardene, Gehan 1990 "Thailand and the Tai: Versions of Ethnic Identity", G. Wijeyewardee (ed.) *Ethnic Groups across National Boundaries in Mainland Southeast Asia*, pp. 48-73, ISEAS.

——————— 1996 "A Preliminary Note on Categories of Thai Identity", *Tai Culture: International Review on Tai Cultural Studies* 1-2: 8-23, SEACOM.

Wyatt, David K. 2003 *Thailand: A Short History*, Yale University Press. (orig. 1982)